



議論を通して生まれた絆のメンバーと神社ツアーに行って最高の思い出をつくります！



この上代文学ゼミの担当者 山田 純

相模女子大学
学芸学部
日本語日本文学科

神奈川県相模原市南区文京2-1-1
042-742-1411 (代表)



2025年度
ニチブン
学科の学びシリーズ

上代文学(神話学)



全長 50m のウサギ

隠岐の島から鳥取海岸に渡りたいウサギ。でもウサギは泳げません。なので、海のわに(今のサメ)を騙して島から浜まで一列に並ばせます。その上を走って海を越えるのです。小学校の国語で「スイミー」の前後に扱ったのではないのでしょうか。「イナバノシロウサギ」です。

元々は日本最古の文献である『古事記』に収録された神話でした。上代文学ゼミではこの研究をしています。



無事に渡り終えたウサギは、わにに向かって「僕に騙されて残念だったね」というようなことを言うわけです。それで怒ったわにに毛皮をかじり取られて丸裸にされてしまいます。



そこへたまたま通りかかった大勢の神々。ウサギに海水を浴びて山の上に登って冷たい風に当たると良いよ、と言うので、その通りにします。すると、どうでしょう。皆さん、真冬に海水をかけて冷たいドライヤーの風に当て続けたら、手はどうなってしまいますか？ そう！！ アカギレだらけになってしまいますね。もしかして…神々って、いじわる？



そこへ主人公のオホナムチがやってきて、と話は続きます。ゼミでは、この話の「神さまなのにどうしていじわ



るなの？」という不思議について議論しています。これまでの研究がどのような説明をしてきたのかを調べて、これをプレゼンテーションした上で、みんなでより良い説明を共同で作りに上げていくのです。

あるとき、学生の一人が、「隠岐の島から鳥取海岸まで100km 程度だが、現実のウサギは1 時間以上を走ることはできないので、それが可能なウサギを想定するなら全長 50m になる」と言いました。優等生なら決して出てこない、いわば

アレ気な発想

ひとつの業種が行き詰まるのは— ある時期のタピオカ店のように— 似通った店が市場にあふれるほど乱立することが原因です。大学教授という優等生の中でも抜きん出た優等生が担ってきたこれまでの研究は、その発想のすべてが「優等生が思いついたもの」で共通していたのです。つまり、「優等生店」が乱立していたため、優等生的発想で市場が飽和していたのです。ですから、今これを読んでいる優等生の皆さん、いちど意識的に優等生ならざる発想をしてみませんか。優等生ならざる発想ができること、これこそが今後に求められる本当の優秀さなのですから。

なお、全長 50m のウサギなど実在しませんから、議論はこの話全体が—ウサギが剥がれた毛皮も含めて—「フィクション」であると進んでゆきました。これまでの研究では、「当時の人々は狩りを通してリアルなウサギの生態をよく知っていた」ことを理解の前提に置いてきたわけですが、しかし、すべてをフィクションであるとしたなら、その解説を現実的に

試みることは誤りとなります。大怪獣ゴジラの説明に現実を持ち込んだら、生物学上 50m の生物は自分の体重を自分で支えられないので潰れて死んでしまうことになります。そのような説明をしたら、「まあまあ、フィクションですから」となりますよね？ 同じことです。では、フィクションとして説明してみましょう。「毛皮」もフィクションだとしたら？ この話の続きに、「毛のあらもの」という言葉で「山の霊力」を示すエピソードがあります。つまり、動物の毛皮は「山」の側の不思議な力を意味しているというのです。つまりウサギはリアルに毛皮を剥がれたのではなく、山の霊力を奪われたのです。誰に？「海」のわに、にです。なれば、この話では、山に住むウサギは、わにという「海」の側の存在によって「山」の「霊力」を剥ぎ取られてしまったことになります。だからこそ、大勢の神々は、だったら仕返しに「海」の霊力を意味する「海塩」を取り返してやれ、とアドバイスしたことになるわけです。いじわるで言ったのではないのですね。

もしもこの議論が論文となるならば、上代文学会賞を受賞できるでしょう。それくらい、すごい。このゼミでは、私はほとんど発言しません。すべて学生の議論です。そこで行われているのは、新研究の一步目、すなわち優等生ならざる発想の共有なのです。従来の研究を勉強するだけの、

ただ「消費者」だった自分から 新たな価値を生み出す「生産者」になろう！

これがこのゼミで学ぶことの意味と価値なのです。